

「ありがとう西高！」新聞

発行元：「ありがとう西高！」実行委員会広報室
Mail：nishikouarigatou@gmail.com
#ありがとう西高

Instagram：nishikouarigatou
twitter：@nishiko_arigato
ブログ：https://thanksomiyawest.blogspot.com/

西高の国際交流を振り返る

大宮西高校では実に40年前から現役生徒による国際交流が行われてきた。今回は国際交流の歴史を振り返る。今でこそ「西高の伝統」の一つであるが、一時は国際交流事業が廃止となる危機もあった。今号では、大宮国際中等教育学校にも受け継がれていくであろう、国際交流の歴史を振り返ることにする。

先生がつないだ、国際交流の伝統

大宮西高で国際交流事業が始まったのは、創立18年目の1979(昭和54)年度のこと。2名の生徒が1ヶ月間、英国でホームステイをしたという記録が残っている。また同年9月、初の交換留学受け入れとしてカナダから1人の女子学生を迎え入れている。1985(昭和60)年度からは旧大宮市と姉妹都市だった米国ペンシルベニア州へのホームステイ事業が始まった。米国の中でも歴史ある都市、フィラデルフィアで、大宮北高校の生徒とともに約40日間のホームステイを行った。派遣選抜には筆記試験やプレゼンテーションがあり、2～4名の生徒のみが行くことができたという。1989(平成元)年度にはインターアクト同好会が韓国との交流を開始するなど、事業の数も増えていった。

ところが1999(平成11)年、国際交流事業廃止の危機が訪れる。「さいたま市の誕生」であった。合併により米国への派遣対象が

「市立高校の生徒」から「さいたま市内在住の高校生」に変わった。それにより市立高校である西高の枠がなくなってしまったのだ。

このままでは国際交流行事が消滅、と揺れていた西高に、救世主が現れる。西高でALT教師を勤めていたカール・レイチェルソンさんである。西高を離れた後、アメリカ・フロリダ州の高校で教鞭をとっていた縁から、「フロリダ・エクスチェンジ」という名の交換留学制度が始まったのだ。ここから毎年3月に20～30名ほど、西高と米国フロリダの高校生がお互いを訪問することになった。

2004(平成16)年にマレーシア、シンガポール研修、2006(平成18)年からはオーストラリア・ケアンズへの研修も新設され、国際交流は西高教育の特色となった。今夏も、ニュージーランドとの交流が行われた。この伝統は4月に開校した大宮国際中等教育学校にも受け継がれると言う。(上條)

閉校関連イベント、日程決まる

来年2020年3月21日に、大宮西高校の「閉校式」と「大同窓会」が行われることが決定した。場所は、大宮駅西口のパレスホテル大宮。参加費は有償で、卒業生、現役生、先生をはじめとして西高関係者が招かれる。「西高に感謝を捧げる」イベントとして、様々な企画の準備が進んでいる。

これに先がけ、3月16日から20日には「ホームカミングウィーク」で西高の校舎が一般向けに開放される。卒業生はもちろん、

近隣住民など一般の方も、無償で校内に立ち入ることができる。イベントが終わり翌4月になると、校舎自体も解体が予定されており、西高の校舎内を直接目にできる正真正銘「最後の機会」となる予定だ。

イベントの詳細は本紙でも随時お伝えしていく。さらに詳細な情報は、告知用のホームページが新設されているので参照のこと。

HPアドレスは以下：

<https://www.nishikouarigatou.com/>



国際交流行事の様子(2012年、西高にて)

あの行事は、今 -交換留学編-

国際交流の要である、留学制度。記者在校時は毎年10名前後の生徒が派遣されていた。記者は残念ながら落ちてしまったので、当時選ばれた西高OBに、思い出を聞いてきた。

オーストラリア・ケアンズへの短期留学。市から補助金がもらえる形で、親からの援助がなくても海外旅行できる機会とあり、競争率は高かった。滞在中はホストファミリーのお世話になりっぱなし。観光に連れて行ってもらったり、語学学校に連れて行ってもらったり。現地の授業では現地生徒と「バディ」を組んで半日間ほど行動を共にした。「たくさん話しかけてくれて、最後は『一生大事なバディだよ』と書かれた手紙をもらって。今も大切にしている」というドラマのような話も。慣れない土地での生活にはトラブルが付きもの。意思の疎通が出来ず、今後の予定が全く伝えられず戸惑った、といったことも。ただ、トラブルも含めて人生の糧になった。「大学で英語を学ぼうと考えた最初の瞬間」と、進路を決めるきっかけになったそうだ。

ちなみに記者の思い出は、留学生を「受け入れる」側の視点。明るく元気な西高生たちは、留学生を心から歓迎。日本文化や高校生活のイロハを教え込んでいた。我々の語学レベルは高くなかったが、生徒たちが等しく外国人と親しめる機会になっていた。東日本大震災の時は、受け入れていた留学生に本国からの帰国指示が出て、本当は帰りたくないと言いつつ泣きながら別れを告げてきた、という逸話もあったと聞く。いつの時代も、留学生を歓迎するのは西高の伝統だったようだ。(小林)

大空西高伝

「伸びしろ」を見てくれた西高に感謝

岡安 章介さん（お笑い芸人）

お笑いトリオ「ななめ45°」のリーダー、岡安章介さん。高校時代から熱心にお笑い活動をしてきたが、卒業後すぐに活動を休止。それから2年後の2000年、現トリオである「ななめ45°」を結成した。後編である今回は、お笑い活動の再開、コンビ結成から20周年となる現在に至るまでの軌跡を追う。西高時代から、現在の活動にまでつながっているものがあるだろうか、聞いてみた。

フリーター2年目 活動再開を決意

「自動車の合宿免許を取りに行ってるうちに、気持ちが冷めちゃって」お笑い活動を休止してしまった岡安さん。西高を卒業してからフリーターとしてあてのない日々を送ることになる。気づけば2年の時が流れていた。

そんな2年後のある日、岡安さんに転機が訪れた。「バイト先に高校時代からの友達が押しかけてきて、すごく怒られたんです。

『もう一回、頑張れよ』『お前には期待してたのに』なんて叱咤激励されちゃって。そうなる少しやる気も出てきて、もう一回やろうかと」心機一転、気合を入れ直して、トリオを再結成することとなる。一部メンバーを入れ替え、現在のトリオである「ななめ45°」が生まれたのがこの時だった。早速、オーディションを受けたら一発合格。現事務所で



最後はおなじみ「ハイ！ななめ45°」を決めてくれた。

あるホリプロに所属することになる。一発合格と聞くともの凄いことかと思うのだが、岡安さんによれば「入るよりも、入った後に生き残るほうが大変」なのだそうだ。「その日は40組受けて、事務所に入れたグループは5組でした。でも半年後に残っていたのは自分たちだけ。そんな世界」と教えてくれた。尊敬していた先輩が突然いなくなってしまうと、先が見通せないのが芸能界らしい。

常に伸びしろを 見てくれた先生方

「西高じゃなかったらお笑いの道に行けなかったと思う」と岡安さんは何度も語っていた。お笑いに集中するため部活を休部することからはじまり、文化祭のDJブース、放送部のラジオ活動など、あまり前例が無さそうな事柄に次々と挑戦した岡安さん。当時を振り返ると、西高の先生にお世話になったことを思い出すのだとか。「他の学校だと、たぶん許容されていない事柄も多かった気がしま

す。西高の寛容な雰囲気には許されていた。きっと先生方が僕たちの『伸びしろ』を見ようとしてくれていたのだと、今となっては本当にありがたい環境だったと思います」と、現在のお笑い活動の根幹を育ててくれた西高と先生方の教育方針に感謝していた。

ちなみに、最初にできた先生の個人名は田中建先生。卒業後しばらくして、浦和でイベントに参加した際、楽屋まで激励に来てくれたことが印象に残っているのだそうだ。自分を覚えていてくれて「頑張ってるな」と褒めてくれたことが嬉しかったのだとか。

無理と思わず やってみる勇気を

最後に現役生に対してメッセージを貰った。「やりたいこと、やってみたら良いと思います。駄目と言われなくても、やってみる場所なので。僕はお笑いに挑戦したら20年続いちゃってますが、そこまでじゃなくてもね」最後まで、軽快なトークで締めくれた。